

父たちの冒険

The Adventures of Fathers

小林エリカ

現実の人間であれ、架空の人物であれ、ホームズもすべからく人間の運命を甘受し、この世の舞台から退いていかなければならないのだ。

シャーロック・ホームズ的事件簿

彼はその胸にまだ生まれたばかりの息子を抱きしめる。白い産着に包まれた小さな息子は、うつらうつらとしながら小さな鼻孔を微かに動かしている。肌はまだ金色の産毛に覆われていて、その黒く深い色の瞳に、世界はまだ霞のようにしか映っていない。視線は交わらない。わずかに汗ばんだ彼の手の中で、息子がゆっくりと目を閉じる。ひよっとしたらこの小さな存在が死んでしまったのではないかと、彼は少しだけ不安になる。彼は町医者だったから、これまで何人もの人間が死んでゆくを見ていたが、生まれてくる人間を見るのは稀だった。

彼は、この息子が成長した後、やはり彼とおなじように医者になるだろうと知っている。というのも、彼の父も、そのまた父も、その父の父も、彼の家は代々医者だったから。愛知県塩

津村拾石の屋敷の庭にはいったいいつから伝えられているのか、金色に光り輝く薬師如来像が祀られた小さな祠もあった。その隣では無花果の木が濃い緑の葉を広げている。外科医になるだろうか、あるいは内科医になるかもしれない。いずれにしても、跡取りになる息子が生まれたのは、めでたいことだった。もうすぐ赤飯が炊かれて近所に振る舞われることになるだろう。いずれ十代目の医者になるその息子は、滋と名づけられた。明治三十一年、一八九八年のことである。

英国のアーサー・コナン・ドイルが書いたシャーロック・ホームズ・シリーズのはじまり「緋色の習作」が日本の新聞に連載されることになる前年。ドイツではヴィルヘルム・コンラート・レントゲンが未知数のXが冠せられた謎の「X線」の発見を発表した二年後にあたる。

「放射能」という言葉もまた、ちょうど生まれたばかりのことであった。

赤子の泣き声が大きく響く。沸かされた湯からは、真つ白な湯気が立ちのぼって消えてゆく。

彼がその息子をはじめて胸に抱いたときの予想は、少しも間違っていないなかった。赤飯が炊かれて近所に振る舞われ、滋は成長し、医者になった。

陸軍依託生として金沢医専に入学、その後、陸軍軍医学校乙種学生、金沢医科大学理学的診療科学専攻生を経て、弘前陸軍病院附の軍医になった。

専門は、外科でも内科でもなく、自身が生まれたのと時期をおなじくして発見された「X線」、つまりレントゲンだった。

彼は、目には見えないものを見ようとする。

目には見えない光が、人間を貫く。これまで見えなかった、身体の内にあるものが、写真乾板の上へ焼きつけられる。

滋は私の祖父である。

ちやうど私が母の腹の中にいるときに死んだので、私はその人を写真でしか見たことがない。

聞いた話によれば、祖父は、ひどく几帳面で厳格な人だった。林檎の皮までアルコールで拭いていたらしい。好物は無花果で、そこについている蟻はしかし平気で一緒に食べたとか。

愛知県蒲郡港のすぐそばにあるその家は、かつて祖父が建てた家だった。緑色の絨毯が敷かれた古い木造。薬師如来像が祀られている祠までは、車で数分の距離だった。巨大なエビフライを出す店が近くにあった。糖尿病を患っていた祖母の台所には、瓶の三ツ矢サイダーがケースに入れられたまま積み上げられていた。居間に飾られている祖父の白黒写真を見つめる。鼻筋がおった顔立ち。切れ長の目。唇の上にはちょこりとした口髭。

私は、彼に、似ているだろうか。

胸のあたりが小さくざわめいた。

+

彼はその胸にまだ生まれたばかりの息子を抱きしめる。白い産着に包まれた小さな息子が、むずかるように唇を尖らせている。薄い肌がたちまち真っ赤に色づいてゆき、その黒く深い色の瞳に、世界はまだほんやりとしか映っていない。視線は交わらない。凍えた彼の手の中で、息子が泣き声をあげる。ひよっとしたらこの小さな存在が死んでしまうのではないかと、彼は少しだけ不安になる。彼はかつて金沢医専時代に買ったイーストマン・コダックの写真機で、息子の写真を撮った。

彼は、この息子が成長した後、やはり彼とおなじように医者になるだろうと知っている。というのも、彼の父も、そのまた父も、その父の父も、彼の家は代々医者だったから。

屋敷の庭は全てが雪に覆われていて、何も見えなかった。

そもそも雪がなくても、そこには薬師如来が祀られている祠はなかった。

いま彼は生まれ育った故郷を離れて青森県弘前市にいた。陸軍一等軍医に昇進し、弘前陸軍病院でレントゲン科主任をやっていた。取り組んでいた論文は「兵の心臓に関するレントゲンの研究」。

あたりは真っ白だった。

まだしばらくの間、雪が降り続けることになるだろう。

外科医になるだろうか、内科医になるだろうか、ひょっとしたらレントゲン医かもしれない。いずれにしても、跡取りになる息子が生まれたのは、めでたいことだった。もうすぐ赤飯が炊かれて近所に振る舞われることになるだろう。

いずれ十一代目の医者になるその息子は、司と名づけられた。昭和四年、一九二九年のことである。

英国ではコナン・ドイルが四一年間書き続けたシャーロック・ホームズ・シリーズに終わりを告げてから二年。ドイツでは後にナチ・ドイツの原子爆弾開発に関わることになるヴェルナー・カール・ハイゼンベルクが不確定性原理を導き出してからも二年。

世界中でいままさに大恐慌がはじまろうとしていた。
赤子の泣き声が大きく響く。沸かされた湯からは、真つ白な湯気が立ちのぼって消えてゆく。

彼がその息子をはじめて胸に抱いたときの予想は、半分はあたっていて、半分は間違っていたことになる。

+

司は私の父である。

彼が生まれたのは青森県の弘前だったが、育ったのは満州のハルビンだった。彼の父が陸軍

三等軍医正に昇進し、ハルビンの飛行第十一聯隊に転任したためである。大東亜戦争がはじまった翌年、今度は金沢陸軍病院長に転任になったため、彼もまた石川県金沢に暮らすことになった。

しかし、ほどなくして彼の父は、遺言状を残し、拾石の屋敷の庭にある祠の薬師如来へわざわざ出向いて手を合わせてから、第十七師団軍医長としてラバウルへ出征していった。

戦争は続いていたが、彼は成長し、医者になるべく、金沢の旧制第四高等学校を受験する。しかしその合格と同時に、学徒動員で富山県井波にある飛行機工場へ動員されたのだった。

彼は軍偵察機新司偵にエンジンを取りつけた。

そうして彼が医者になるよりも先の一九四五年、日本には原子爆弾が二つ落とされた。

八月六日広島街にはウラン型原子爆弾、リトルボーイ。

八月九日長崎の街にはプルトニウム型原子爆弾、ファットマン。

彼は新聞の切り抜きの裏に墨で書きつける。

八月十日快晴 Ⅱ 健児 学徒特攻 一番乗 今日の良い天気だった

目には見えない光が、人間を貫く。身体は一瞬にして蒸発し、その影だけがコンクリートの上に焼き付けられる。

日本敗戦。それでも彼は医者になるべく、勉強を続けた。

彼の父が戻ってきたのは、戦争が終わってから一年半後のことだった。彼の父はもはや軍医

ではなくなった。親戚に金を借り、愛知県蒲郡に小さな診療所を開いた。薬師如来像の祀られている祠から、そう遠くない場所だった。彼の父は父の父とおなじ町医者になったのだった。

彼は旧制第四高等学校を卒業し、新潟大学医学部、東京大学大学院医学部神経精神科へ進学する。フルブライト留学生として氷川丸に乗り、アメリカのピッツバーグ大学、ゲイルズバーク精神医学研究所で三年間研究した。帰国後は東京神経研究所晴和病院に勤めた。

彼は医者になったのだった。

専門は、外科でも、内科でも、レントゲンでもなく、精神薬理学だった。

彼は、目には見えないものを見ようとする。

その点では、彼らは似ていたのかもしれない。

しかし、三人の娘ができ、四人目の娘、つまり私が生まれるより前に彼は医者をやめたのだった。

父は片づけが嫌いな人だった。本を散らかし、風呂でも身体を洗わず、耳垢は絶対に取ろうとしなかった。東京都練馬区、アメリカから戻ったばかりの父が中古で買った一軒家はいつも汚かったが、母も四人の娘たちも、だれひとり掃除をしようとはしなかった。勝手に片づければ、父が怒るから。

幼い頃の私は三人の姉たちと一緒に椿模様布団の上に寝転がり、窓の向こうから射しこむ光の中を埃が落下してゆくさまを、いつまでも見続けた。

台所から父と母の話し声が聞こえる。

ヴィクトリア朝時代ロンドンの殺人事件、阿片窟にコカイン注射、スキヤンダル。

ふたりが話すのは大概そんなことばかりだった。

父はシャーロック・ホームズの研究家になったのだった。

私が成長するまでに、父は母と一緒にシャーロック・ホームズ物語全六〇編を日本語に翻訳することになる。

父が死んだのは、東日本大震災が起きる、前年のことだった。

シャーロック・ホームズを生み出したコナン・ドイルが死んでから八十年の年月が経っていた。

「放射能」という言葉が生まれてから一二年。

父は福島第一原子力発電所の事故を、放射性物質が降ることを、いずれ私が子どもを産むことになるのを、知らないまま逝った。

+

彼はその胸にまだ生まれたばかりの赤子を抱きしめる。私は彼に抱かれた私の子を見る。白い産着に包まれた小さな子は、高い音をたててしゃつくりを繰り返している。肌にはまだ蠟

のような胎脂がところどころについて、その黒く深い色の瞳に、世界はまだ霞のようにしか映っていない。視線は交わらない。パステルカラーに塗られた面会室の彼の手の中で、子がふっと静かになる。ひよっとしたらこの小さな存在が死んでしまったのではないかと、彼は少しだけ不安になる。彼は医者でもなかったし、生まれたばかりの人間を見るのはじめてだった。

彼は、この子が成長した後、何になるかを知らない。

彼は、この子が本当に彼の子なのかさえ、本当には知らない（DNAテストでもしてみないかぎり）。

面会室の隅で女が赤子を胸に抱きながら歌うように囁いている。

窓の向こうにはビルと工事現場が見えた。

朝降っていた雪のせいでクレインの先端が白く煙って見えたが、アスファルトの上の雪はもうすっかり消えてなくなっていた。

赤飯は病院を退院した日、私の母が近所のスーパーで買ってきた。私たちは、東京の狭いマンションの一角で、それを誰に振る舞うこともなく自分たちで食べた。

リビングに置かれたベビーベッドのなかで、タオルに包まれた子がゆっくりと瞬きをする。胸のあたりが小さくざわめいた。

この子は、彼に、似ているだろうか。

彼に、彼らに、似ているだろうか。

私は医者にならず、作家になった。私は四人姉妹の最後に生まれた女で、十二代目にして、父たちの家は消滅した。代々父たちは医者として働いてきたが、もう、私は誰のことも治せない。昨年、屋敷の庭にあった薬師如来像もそれが祀られていた祠も、別の神社へ移された。無花果の木は枯れたのか切り倒されたのか、もうとつくになくなっていた。

赤子の泣き声が大きく響く。沸かされた湯からは、真つ白な湯気が立ちのぼって消えてゆく。

目には見えない光が、人間を貫く。これまで見えなかったものたちが、今、私の目の前に、晒されている。

（群像 二〇一九年四月号）

まえらつて誰と誰なんて訊いてしまった。あれは間違つた。おれはこういふときに決まつて間違える、でも、おれのせいじゃない。パチャン！ いやだよ、帰るつて決めてあるんだから、決めたつてことは、どうであれ帰らなくちゃ。ワツ！ そうやつて、ここにいつまでも縛りつけておこうつてことだらうけど、だいじょうぶ、まだ立ち上がる機会はある。もう音はやんだ。ほら。この男と別れて家に帰れば、蒲団にもぐつてしまえば、全部忘れることができる。おれがこいつやこいつの言う、そいつだのあいつらだのと一緒なんかじゃないつていうことはつきりする——そう、こちらが考えていることなど関係がないというように、というのはつまり、池のあちから再び聞こえて来た管楽器の音が、またおなじ繰りかえしをはじめだす。そうやつて、自分を男と切り離せず立ち上がれないままにいる耳に、とうとうまた煙草に火をつけるライターのチツ！ という音がした。

(新潮 2019年7月号)

韓国人の女の子

西 加奈子

シン君に会った。

最初は気づかなかった。スーパーの前でスマートフォンをいじっている男の人がこっちを見てるな、と思っただけだった。私はテレビに出ているので、たまにこういうことがある。大概名前は覚えてもらえていなくて、「なんか見たことある」っていう程度の関心だ（だからマスクも眼鏡も必要なかった。自意識過剰と言われる）。

なんにせよ、こんなにジロジロ見てくるなんて面倒臭い人に決まっている。早足で通り過ぎようとすると、

「ハナ？」

そう、声をかけられた。私をハナと呼び捨てにするのは家族か、昔の、それもうんと昔の友人だけだ。顔をあげると、顔中髭だらけの、小さくて太った男の人が、「信じられない」という顔で笑っている。

「シン君？」

シン君は大きく手を広げた。

「懐かしい！　なんで？」

この場所でシン君に会うなんて。

仕事で大阪に帰ってきていた。時間が出来たから、ホテルで休もうと思ったのだけど、なんだか落ち着かなくて外に出た。とりあえずタクシーに乗って行き先を聞かれて、この街の名前を伝えてしまった。

20年近く経っているのに、何もかも昔のままだった。道路脇に急に現れるお地藏さん、小さな郵便局、喫茶店を併設した理髪店。そこを曲がると、いつもカップラーメンを買っていた安売りのスーパーマーケット。その前に、シン君は立っていた。一つ年上のシン君は、じゃあ今は41歳になっているはずだ。

「ハナ、変わってへんなあ！」

ハグする腕をほどいて、シン君がそう言った。信じられなかった。だって私は、このスーパーに来ていた頃の私とは、すごく変わったから。

「シン君も。」

「嘘つけや！　めっちゃ太ったやろ？」

笑っているのか分からなかった。でも、シン君が大声で笑っているから笑った。

「ハナの活躍は知ってるで。」

「嘘やん。」

シン君を前にすると、長らく使っていなかった大阪弁が自然に出る。

「ほんまやん。こないだもテレビ見たって！ なんやつけなあ。」

私はエッセイストだ。7、8年ほど前からテレビに出ているのは、いわゆるコメンテーターと呼ばれるから。テレビ画面に映った私の下に現れるポップアップには「エッセイスト。一児のシングルマザー」と書かれる。

シングルマザーであることは、どうやら私の「売り」だった。結婚をせずに子供を産んだことを書いたエッセイが思いのほか売れ、それからちょこちょこテレビに呼ばれるようになった。

「サティなんか、ハナの本全部持つてるで。」

「サティが？」

シン君とサティが結婚したことは知っていた。サティが手紙を送ってくれたのだ。連絡先を変えていたし、昔の友人には一切伝えていなかったから、出版社宛に届いた。

「なんでこんなとおんの、有名人が。」

「有名人なんかやないわ。」

シン君が嫌味を言うような人ではないことは分かっていた。まっすぐこちらを見るシン君を見てみると、20歳の頃のようににはかんでしまう。

「仕事で帰って来てるんやけど、ちょっと時間出来てん。近くやったし、それで。」

そこから少し沈黙した。私から聞くべきなのか迷った。聞かないのも意識しているみたいで

おかしい。ぐずぐずしていると、

「ガクとは連絡取ってるん？」

シン君の方から言ってくれた。ガク。名前を聞くだけで体のどこかが鳴る。

「ううん。」

「そらそやんなあ。俺も全然会ってないで。」

「え、そうなん。」

「せやねん。あいつ携帯の番号変えてさ。」

いつかインターネットで見た電話番号だろうか。それを見つけた瞬間、私は何年も会っていないガクの電話番号をはっきり覚えていることに驚いた。そして数秒後にやっと、こんな風に個人情報が晒されているガクの境遇を思っただけで震えたのだ。

「あいつ結婚してん。」

「そうなんや。」

「帰化したらしいねん、ガク。」

「え。」

「信じられへんやろ？　なんか、子供が出来て結婚したんやけどな。奥さんと向こうのお父さんにどうしても、て頼まれたらしいで。」

そんな、と声に出たけれど、それ以上続かなかった。

「ガクから直接聞いたわけやないねんけどな。」

「誰に聞いたん？」

「ガクのおかん。まだこの近所に住んでるよ。」

「そうなんや。」

それからとうとう、何も言えなくなった。

ガクが帰化した。

ガクが日本人になった。

そのことに、自分でも驚くほどのショックを受けていた。そして、そのショックの多くを占めていたのは、あの子がいなくなってしまった、ということだった。私たちの間にいた、あの「韓国人の女の子」が。

ガクに初めて会ったのは、アメ村にある小さなクラブだ。

地下に続く急な階段を降りて扉を開くと、ほとんど正方形のフロアがあって、少し高い位置にDJブースが設置されていた。お酒のせいかな、みんなの汗のせいかな、フロアはいつもなんとなくベトベトしていて、一つしかないトイレは落書きと吐瀉物で汚れていた。そのトイレが嫌だから、私たちは外に出て、コインパーキングにある自動販売機の裏で用を足したものだ。サティとしやがみながら、私たちはいつも大声で笑った。サティは臍にピアスをしているからなのか、おしっこがいつも思いがけない方向に飛ぶのだ。

私はドラッグストアでアルバイトをしていた。バイト仲間のシン君に、イベントに誘われ

た。背が小さくて、黒目がちの目をしたシン君。優しくて面白いシン君。店頭に商品を並べるとき、通りに綺麗な女の人を通ると、わざと大きな声で、

「ويس پار 多い日の夜用大変お安くなっております！」

そう叫んで赤面させたり、閉店後にコンドームをポケットにパンパンに入れて帰ったりした。シン君のことがみんな好きだったし、私はもっと好きだった。だからシン君に誘われたイベントには、全部参加していた。

シン君はDJだった。オールドスクールのヒップホップをかけて、自分も古着屋で見つけた古いアディダスのジャージを着ていた。私もその日は、アディダスのジャージを着て行った。

「お、ハナ、俺らおそろいやん。」

「ほんまやな。」

カウンターに行くと、サティが意味ありげに笑った。

「ハナは分かりやすいねん。」

「分かりにくかったらあかんやろ。」

いつもDJはシン君とMEN-bow 君という男の子だった。でもその日は、もう一人別の男の子がいた。

MEN-bow 君はアフロヘアに大きな眼鏡、ブリンブリンのネックレス、シン君と同じようなオールドスクールな、いかにも「ヒップホップ」というような格好をしていたけれど、もう一人の男の子は違った。ボサボサの髪の毛は目も耳も隠していて、ピタリと体に沿う黒い服を

着ている。どう見ても場違いという感じだ。中でも私が一番おかしいと思ったのは靴で、なんかもう、牛の角みたいにピカピカに白く光って尖っていた。

「どこで買うねやろあの靴!？」

サティが耳元で叫んだ。

「ほんまやな、人刺せるであれ！」

それがガクだった。

ガクはシン君の幼馴染で、中学2年生から引きこもりだった。といっても学校に行かないだけで、シン君と一緒に遊んだり、障害を持った子供たちの学童保育をするボランティアをやったりしていたらしい。2ヶ月間アイルランドの語学学校に留学して、最近帰ってきたそうだ。

シン君は、一つ年下のガクのことが可愛くて仕方がないらしく、ガクがそばを通るたびに急に背中にしがみついたり（ガクの方がうんと背が高かったから）、自分が吸っているタバコの煙を吐きかけたりした。ガクはずっと無表情だった。変な子やな、と思った。

「引きこもりってどんなん？」

カウンターで一緒になった時、私から話しかけた。ガクはロンサカパというラムをストレートで飲んでいた。

「アホがする質問やな。」

ムツとしたけれど、失礼なのは私の方だと思い直した。だから謝った。

「ごめん。なんか気まずかったから適当に聞いてしもた。」

ガクはちよつと驚いた顔をして、私を見つめた。不自然なほど長く。それからポケットに手を入れて、白い筒状のものを取り出した。ドラッグストアで働いているからすぐに分かった。鼻孔に噴射する鼻炎スプレーだ。私が見ていると、ガクは私の目をじっと見ながら、鼻にスプレーを突き刺した。薬液を鼻から垂らしているガクを見て、思わず吹き出してしまった。

「なんで笑うねん。」

「だって、それってそんな風に人の目見ながらやるやつちゃうやん！」

「そんなん、説明書に書いてへんやろ。」

私はもつと笑って、ガクは笑わなかった。私の顔を見続けた。

「お前、変な顔やな。」

連絡先を交換したけれど、それからすぐにガクに恋をしたわけではなかった。私は相変わらずシン君が好きだったし、バイトのシフトはなるべくシン君に会えるように調整していた。でも数日後の夜、私はガクにまた会ったのだった。

私は酔っ払っていた。飲み会の帰りだった。梅田からタクシーに乗ったのだけど、途中で吐いてしまつて、無理やりタクシーを降ろされた。ふらふら歩いていると、スタンスミス（これもシン君とお揃いだったから買ったのだ）も自分のゲロで汚れていることに気づいた。

難波神社でスタンスミスを脱いだ。階段に座り込んでペットボトルの水を手につけ、素手で靴を磨いた。私はすごく酔っていた。

人が立っている、と思ったのと、顔をあげたのと、目の前にだらりと垂れ下がった陰茎があつ

たのが、なんだか全部同時に起こった。声を出したように思ったけれど、その時にはもう後頭部を大きな手で押さえつけられていて、私の顔はその人の下半身に埋もれた。

なんでこんな場所でもここ御堂筋やでああでも夜の3時か人は通らへんかというか怖い怖い怖い怖い怖い。何秒くらいそうしていたのか分からない。私にはものすごく長い時間に思っただけ、多分数秒だ。息が苦しかった、それは口が塞がれていたからではなくて、私が呼吸をしていなかったから。

頭を離されて、ものすごい開放感があった。思い切り息を吸ったけれど、声が出なかった。走ってゆく足音と、男の人たちの笑い声が聞こえた。何やってん、とか、捕まるでお前、とか言っていて、きつと合計で四人くらいいた。

私は這って逃げた。腰が抜けていたのだ。ガクガク震える足を叩いて、なんとか立ち上がるまでに時間がかかった。それから全力で走った。スタンスミスを片方置いて来てしまったけれど、取りに戻ることも出来なかった。

気がついたら御堂筋をだいたい北に戻っていた。やっと我にかえて、目についたコンビニに飛び込んだ。コンビニの明るさに、知らない店員の普通の態度にめまいがして、すぐに外に出てしゃがんだ。震える手で携帯を手にとってコールしたのは、サティでもシン君でも、もちろんお母さんでもなくて、なぜかガクだった。

ガクは電話をして10分もかからないうちに来た。黒光りした大きな車に乗って、魔法みたいに早く。運転席から出てきたガクは、長かった前髪を眉毛の上で真っ直ぐに切りそろえてい

た。瘦せたカッパみたいだった。

「あんた免許持つてるん？」

「持つてる。」

「引きこもりやのに？」

「引きこもり割引で取ったんや。」

「何その車。」

「ソアラじゃ。」

「ヤクザみたいやな。」

「ええから早よ乗れ。」

ガクは私をソアラに乗せて走り出した。

法定速度をうんとオーバーして、南港の方まで行った。ソアラを降りても、二人とも何も喋らなかった。東の水平線から太陽が昇ってきて、それはまるつきり馬鹿みたいな明るい光で、私より先にガクが泣いた。

そのままガクはうちに来た。そして、帰らなくなった。

私たちは片時も離れなかった。ガクは親にお小遣いをもらっている引きこもりだったし（まだニートという言葉はなかったと思う）、私は呑気な大学生だった。その上、親に頼んで引越しまでさせてもらった。ガクの実家の近くだ。6畳一間のマンションはガクの服やレコードで溢れ、床にはガクが持ってきた本が高く積まれた。

ガクは難しい本ばかり読んでいた。シン君は年下のガクのことをとても尊敬していた。

「あいつめちゃくちや頭ええねん。時々喋ってると怖なるもん。」

そのことをガクに伝えると、眉間に皺を寄せる。

「シン兄が阿呆過ぎんねん。」

ガクは言葉が悪かった。私も人のことは言えなかったけれど、ガクはなんていうか筋金入り、という感じだった。ブスとか死ねなんて序の口だった。きちがい、バクソ、ポン助、シャブヅラ、ありとあらゆる汚い言葉を使った。怒ってる時だけじゃなく、例えば私に愛を表明する時にも、そんな言葉を使うのだ。

「ハナ好きやでどついたらこのオメコ。」

いつしか私にも、ガクの口の悪さが移ってしまった。

「うちも好きやでイテコマしたるかチョン。」

ガクは在日朝鮮人だった。シン君が「在日」なことは知っていたけれど、

「シン兄ちゃんは韓国籍や。」

ガクとシン君は、3世と呼ばれる世代だ。二人ともルーツは済州島で、おじいさんもおばあさんも戦前から日本に住んでいた。

朝鮮籍というのは、戦前から日本にいる「朝鮮人」に、自動的に与えられた記号だ。日韓関係正常化の後に出来たのが韓国籍で、つまり在日朝鮮人たちには、韓国籍になる選択肢が与え

られた。でも、ガクのお父さんも、シン君のお父さんも韓国籍を選ばなかった。アメリカが嫌いだったからだ。アメリカの傀儡政権だった韓国ではなく、朝鮮籍でいることを選んだというわけ。それはすなわち、北朝鮮籍になるのだけど、日本と北朝鮮は国交がないから、韓国籍以外は朝鮮籍となるのだそう。

MENbow 君もガクと同じ朝鮮籍で、それはどうしてかという、いつかまた戦争になった時、韓国籍だったら徴兵される可能性があるかららしい。私は、韓国に徴兵制があることも知らなかった。

「シン兄も元々は朝鮮籍やったけど、変えたんや。韓国籍に。」

「なんで？」

「ヒップホップ好きやから、いつか絶対にアメリカには行くやろ？」

「朝鮮籍やったらアメリカ行かれへんの？」

「行かれへんことはない。MENbowも昔家族でハワイ行ったらしいで。ただ手続きめっちゃめんどかったらしいわ。」

「日本国籍に変える人はおらんの？」

そう言った私を、ガクはうんざりした顔で見た。

「お前、よう簡単に言うてくれんのう。」

「だって、日本に住んでるんやから。」

ガクには選挙権がなかった。だから、選挙権を持っているのに選挙に行かない私をなじっ

た。選挙カーが横を通るとわざと手を振る。そして、「よろしくお願いします」と言われたら「ほな選挙権くれや」と叫ぶのだ。そんなことをするのなら、選挙権がもらえるように日本国籍になればいい。私がそう言うと、ガクは白目を真っ赤にして私を睨んだ。

「お前は何も分かってへん。」

ガクは教育熱心なお父さんに、小さな頃から「弁護士か医者になれ」と言われて育った。それはガク曰く、「当時在日がなれたエリートの一択」だったそうだ。小学校から国立大学の付属校に通わされたのだけど、日本人に帰化させる気はお父さんにはなくて、朝鮮人のアイデンティティを大切にしろと言われた。でもそこで、在日という理由で「死ぬほど」いじめられたのだそうだ。

「俺の人生も分断させられてる。」

お父さんのお友達が北朝鮮に帰る時は家族で多額のお金を出して、でも北朝鮮にいる親戚に会っても言葉が通じなかった。ついでに小さい頃はお母さんに女の子の服を着させられて、女の子として育てられて、でもお父さんや親戚には「強くなれ」と言われてボクシングを習っていた。

「俺は、俺がどこにおるんか分からん。」

私と出会う数ヶ月前に、ガクにとって決定的なことが起こった。

アイルランドに行った時だ。乗り継ぎのロンドンのイミグレーションで止められたガクは、小さな部屋に連れてゆかれた。北朝鮮のパスポートを持って日本から来たガクに、入国審査官

はこう言ったそうだと。

「フーアーユー？」

そんなセリフ、映画でしか聞いたことがなかった。

「なんて答えたん？」

「お前こそ誰や、て言うたよ。」

入国審査官がなんて答えたのかは聞かなかった。

ガクは書類に山ほど North Korea と書かされたけれど、入国審査官は結局それを線で消して、その上から X で始まる数字を書いたそうだと。後から知ったことなのだけど、それは難民を意味していた。

「もし俺が強制送還になった時、どの国に送り返したらいいんやって。」

ガクはこの話をする時、いつもよりまばたきが多くなった。それはなぜか、私と出会ううんと前のガク、小さな頃のガクを思い起こさせた。

「腹立ったけど、誰をどついてええんか分からなかった。俺はこの件で、誰に怒ればええん？」

頭に血が上がるのが速かったし、目つきも悪かったけれど、ガクはとても優しくかった。道端で死んでいるネズミや雀がいれば、それがどんなに悲惨な状況でも、なんとか拾って土に埋めて、手を合わせた。年を取った人や障害のある人が電車に乗っていたら絶対に「何か手伝える？」と声をかけたし（敬語は使わなかったけれど）、一人で遊んでいる子供を見つけたら、

日が暮れるまで一緒に遊んだ。

もちろんその優しさは、私にも向けられた。ガクは私が置いてきたスタンスミスの代わりに、赤いバンズをプレゼントしてくれた。靴屋で万引き（ほとんど窃盗）したものだとは後で知ったけれど、嬉しかった。ガクはいつも、召使みたいに慇懃に、私にそれを履かせてくれた。疲れたらおんぶしてくれたし、ご飯を食べるのが面倒臭い時は、プラスチックのスプーンを使って食べさせてくれた。私はガクという優しい服を着ている子供みたいだった。

でも、そんなガクと、私はよく喧嘩をした。

大抵つまらないことから始まった。遊びに行きたかったのにガクが起きない、ガクに買ってきて頼んだ鎮痛剤の銘柄が間違ってた、私がシン君の話を嬉しそうにしすぎる、私がガクの大切になっているレコードを窓辺に放置した（直射日光に当たると曲がってしまうらしい）。

最初は汚い言葉で罵り合うだけだったが、最終的には二人とも暴れた。ガクは壁に穴を開けたし、お風呂場の扉を壊したし、私はガクのことを殴って、蹴って、一番ひどいときは、ソアラの上でジャンプしてボンネットをへこませた。

最悪なのは、最終的にいつも「こっちの方がどれだけ大変か」合戦になることだった。ガクは「お前に在日の気持ちは絶対に分かん」と叫び、私はガクに「あんたに女の気持ちは絶対に分かん」と叫んだ。

私はあれから、時々恐怖がフラッシュバックした。どんなに人がいても夜は一人で歩けなくなったし、難波神社には近づくことも出来なかった。あとから色々思い出すと、「あれ」をし

たのはサラリーマンで、だからスーツの人たちが集団でいたり、男の人が複数で笑い声をあげていると、怖くて体が固まった。

そして、もっと思ひ出すと、そもそも大学の飲み会の時点で、女の子だけめちゃくちゃ飲まされたし、卑猥なことを耳元で言われた。もっともっと思ひ出すと、三つ年上の男の子相手に処女を喪失した時、「痛い」と言ったのにやめてくれなかったし、頼んでも避妊具をつけてくれなかった。もっともっともっと思ひ出すと、ブルマを穿いている私たちを見る先生の顔がすごく気色悪かったし、水泳の授業をズル休みしないように生理の周期を記録させられていた。当時は何とも思っていなかったことに對して、私は遡って怒った。そしてその怒りを、全てガクにぶつけた。

自分の体の中に、こんなに強い怒りがあることが信じられなかった。人を嫌いたくなかったし、人にも嫌われたくなかったから、私はなるべく穏便に生活を送っていた。でも、ガクを前にすると、私は簡単に理性を失った。ガクは驚くほどの確に私の怒りに火をつけた。こんなに腹の立つ人間に会ったことがなかった。喧嘩の最中、私は何度もガクを殺そうと思った。それともガクに殺されて、一生後悔させてやりたいと思った。

「お前に在日の気持ちは絶対に分かん。」

「あんたに女の気持ちは絶対に分かん。」

ガクを傷つけることに心を砕きすぎて、そして、ガクよりも生きることが困難な自分を誇示したくて、私はあの晩股間に顔を押しつけられただけではなく、いっそレイプされたら良かった。

たとすら思った。そんな風に考える自分をおぞましいと思いながら、あの時押しつけられた陰茎がだらりと垂れ下がって、ちっとも大きくなっていなかったことを今更思い出して傷ついた。ガクといると、自分がどんな人間なのか分からなくなった。

喧嘩が終わると、いつもお互いぐったりした。耐えられへん、毎日そう思った。でも私は、ガクのことが好きだった。ガクも私のことが好きだった。お互い絶望するほど好きだった。

「韓国人の女の子」は、そんな不毛な喧嘩をしないようにするために、ガクと私が編み出した回避策だった。「在日の気持ちに絶対に分らない私」と、「女の気持ちに絶対に分らないガク」の、ちょうど中間はなんだろうと話し合った結果、それは「韓国人の女の子」なのではないか、ということになったのだ。

もちろん、おかしい話だということは分かっている。「ちょうど中間」の人間なんていないし、かろうじてあるとしたら「在日の女の子」が、きつと正しい。でも、その子は、その存在は、片言でなくてはいけなかった。自分の意見をベラベラ喋らず、大切なことだけを静かに言葉にして、世界を丸ごと受け入れ、そして何より優しくなければならなかった。

「サランヘヨ。」

一番盛り上がるのは、おかずやお菓子が一つ余った時だ。「韓国人の女の子」は、もちろんそれを分け合うのだけど、ただ分け合うのではない。

「タケシマ?」

「ドクト?」

竹島であり独島である島を分け合う。

「ドウジョー。」

そして、微笑み合うのだ。

「韓国人の女の子」は、どこにでも出没した。神出鬼没だった。クラブで朝まで踊ったり、パチンコ屋の前に繋がれている柴犬を撫でたり、ソアラの中で大声で歌ったり、大麻を分け合ったりした。

どちらかが「韓国人の女の子」になると、すぐに分かった。口角をあげ、いかにも慈愛に満ちた微笑みを浮かべた時がそうだった。そして、片方が「韓国人の女の子」になったら、もう片方も必ず「韓国人の女の子」にならなければいけなかった。私たちはどんな時だって、そのルールだけは律儀に守った。

「みんなが『韓国人の女の子』やったら、世界はもっと美しいやろうな。」
いつかガクが言った。私もそう思った。

ガクとは1年間しか一緒にいなかった。たった1年だ。

ある日、ガクが朝方帰ってきた。浮気を疑っていた私は家中のものを投げてガクを責めたけれど、ガクの手や服に血がついているのを見て黙った。

シバいた、ガクは言った。

道で客引きをしている女の子に絡んでいたサラリーマンに、後ろから蹴りを入れて、そのま

ま馬乗りになって殴ったのだと。酔っていたけれど、冷静だった。とにかく衝動が抑えきれなかったのだそうだ。

「そんなん、」

私がそこまで言うと、ガクはやっぱり、私より先に泣いた。

「そんなん間違ってる。」

ガクが瞬きをした。何度も何度も。それから、しんどい、と言った。

「お前とおるのんしんどい。」

私もそうだった。

「めっちゃ好きやけど、しんどいねん。」

普通に別れることは出来ないだろうと思った。ガクがいる土地を、ガクがいない状態で生きてゆくなんて、私には絶対に出来ないだろう。

大学を辞めた。両親に泣かれた。ひどい娘だと思う。同時に、ひどい人間だった。私は全ての友達との連絡を絶った。そして東京へ行った。体が引きちぎられるようだったけれど、それでも私はそうした。自分にこんな大胆なことが出来るなんて信じられなかった。

東京行きの夜行バスの中で、小説家になろうと、唐突に思った。ガクとのこの関係を、いつか小説に書こうと。小説なんて書いたことも、読んだこともなかったのに。

でも結局、それは果たせていない。

ホステス、テレフォンアポインター、コーヒーショップの店員、色んな仕事をしながら、私

はだんだん東京に慣れていった。

東京は、急な流れの川のようなだった。自分で自分を傷つけてしまうほど失っていた私の体は、その流れに抗いきれず、翻弄され、どんどん削られた。自分の輪郭が丸みを帯びてゆくにつれ、少しずつ人の痛みを想像する余地が生まれた。人を受け入れ、人に受け入れられることに寛容になった。

そうして、毎年当たり前のように年を取り、あらゆる人と恋に落ち、寝て、家族になるつもりがない人との間に子を設けた。予想外の妊娠ではなく、はつきりとした意思を持った妊娠だったこと、産まれてきた子供を見た瞬間、自分の人生がたった今始まったのだと思ったこと、いつかそのことを子供に伝えるために、エッセイを書いた。

出版社に売り込んで、優秀な編集者に出会えた。私の本は出版され、優しい読者に受け入れられ、いつしかテレビにも呼ばれるようになった。でもそこで私は、私が選んだことが特別なことだったと思わざるを得なくなった。

日本という国で、意思を持ったシングルマザーとして生きてゆくことは、それを選ばなかった人たちにとって、たくさんの驚きと困難のある人生なのだった。私はテレビに出て初めて「子供が可愛いそう」という反応に出会った。「みんなシングルマザーになりたいくなっていないのに」という反応にも、「子供を商売道具に使っている」という反応にも、初めて出会った。

私は女性蔑視やマイノリティ差別と戦うようになった。パネルや講演会に呼ばれたら積極的

に出かけ、たくさんの人と意見を交わした。マイノリティにはもちろん女性だけではなく、あらゆる人が含まれた。もちろん在日外国人たちもだ。

ある日、インターネットを検索していたら、大阪で起こったヘイトスピーチの動画を見つけた。その中にガクがいた。

ガクは、デモ隊の前に乗り付けたトラックの荷台にいた。ターンテーブルが設置されたそのトラックには、ガクの他に女の人と男の人が一人ずついた。ガクが大音量で流していたのは吉本新喜劇のテーマソングだった。関西の人なら誰でも一度は見たことがある新喜劇のあの音楽は、気が抜けていて、ちゃんとアホで、信じられないくらいその場にミスマツチだった。でも、だからこそ、誰がどんなひどいことを言おうと、それは新喜劇的一幕みたいなコメディに見えた。

その時の私の気持ちは、うまく説明できない。

懐かしさ、痛み、羞恥に似たものの、誇らしい気持ち。そして、その感情のどれも、自分に感じる権利はないように思えた。

ガクの名前を検索すると、日本名と韓国名、写真、電話番号が晒されていた。デモの時に撮られたのだろう、写真のガクはすごく疲れているように見えた。よく見ると鼻の下が濡れていて、それが鼻水なのか花粉スプレーの薬液なのか、私には分からなかった。

ガクが帰化した。

ガクが日本人になった。

私たちの間にいたあの「韓国人の女の子」が、いなくなってしまった。

そんな風に思いながら、私はシン君に会うまで、「韓国人の女の子」のことなんて、綺麗に忘れていた。つまり「韓国人の女の子」はとっくにいなくなっていたわけだけど、ガクの帰化がそれを決定的にした。

「そんなん、」

間違ってる。間違ってる？ 少なくとも、間違っていた。

そうだ私たちは、間違っていた。

正直、韓国人の女の子がどういうものか分かっていなかったし（韓流アイドルなんてその頃はまだいなかった）、きつともう私たちの振る舞いそれ自体が、女性蔑視で外国人差別だった。お互いを「オメコ」「チョン」と呼び、喧嘩の時はそれを盾に罵り合って、都合の悪いことには蓋をした。

ガク、私たちは間違っていた。

「サティも会いたかったと思うで。」

シン君が言った。

「私も会いたいよ。」

それでも、今の私には、私たちには、「韓国人の女の子」を作ることは出来ない。あの優しい女の子を。その事実だけでも、あの頃より今の方が間違っているような気がする。

いつからか、誰かの「正しい」のために戦おうと思う時、「正しいこと」をなぞろうとする時、「正しいこと」を話している時、体のどこかが軋むようになった。簡単な場所ではなかった。私も触ったことがない、どこか分らない場所だった。自分自身でも気づかないほどの、疼きうずと言っているほどの動きだった。いっそ、強い痛みを伴ってくれたらいいのに、それにはわずかな痛みすらなかったから、私はそれを無視した。何度も何度も無視した。

「私行かなあかんわ。」

「おお、そうか、ごめんごめん。テレビ？」

「ううん、ラジオ。」

「聞くわ！」

「ええよ、聞かんというて。」

「なんでやねん！」

シン君と別れて、しばらくそこに立っていた。大通りに出ないとタクシーは通らないはずだ。でも、私はその場を動かなかった。

今日はラジオで、何を話すんだっけ。用意してきたはずの言葉をたぐり寄せながら、私は手を伸ばした。歩道から大きくはみ出して、ほとんど車道の真ん中で、誰も通らない道に向かって。

(文藝 2019年秋季号)

黒米と大麻

滝口悠生

今年の二月に生まれたから、半年とちよつと。でも体重が十一キロもあつて、余裕で一歳児並み。

由里さんとチコのあいだに生まれた娘ハルちゃんは、ベッドの上で腰掛けた由里さんの膝の上で力士のような安定感で座っていた。目を大きく開いて、深夜に突然現れた見慣れない客人ふたりをじつと見ている。

ほんとだ、なんか大きいね、と妻は言つて、え、ほんとに大きい、ともう一度言つて、笑つた。

ずっと寝てたんだけど、さっき起きた。なんか大きいでしょ。

なんでこんな大きくなつたの？

えーわかんないよ。

表で煙草を吸っていたチコが入ってきて、ベッドに飛び込むと由里さんからハルちゃんを奪い取るように抱きしめて、頬をすり寄せた。もう、やめて、チコ、手洗つてからにして、と由

里さんは顔をしかめ、そう言いながらもハルちゃんをチコに任せてキッチンの方に立った。

遅いけど、ご飯まだでしょ？ と訊かれて、私と妻は顔を見合わせた。まだです、と私が言った。

昼前にロンドンのヒースロー空港を出て、ローマのフィウミチーノ空港には二時くらいに着いた。空港でペルージャ行きのバスを探すのに手間取って右往左往し、ゆっくりご飯を食べる時間はなく、疲れと不安とトラブルで険悪な雰囲気になり、空港のベンチでほとんど無言のままふたりはサンドウィッチを食べた。

それからどうにかバスを見つけ、午後五時にペルージャ行きの長距離バスに乗った。ローマを出てペルージャまでおよそ四時間。車内は清潔で涼しく快適だったが、空港で買った水があっただけで、途中なか買えるような場所も時間もなかった。到着したペルージャのバス停で迎えに来てくれたチコと無事に会い、チコはなぜか途中でバーに寄ってビールを一杯飲んだ。私も飲んだ。歓迎に、ということらしかった。それでそこからチコの荒い運転で一時間ほど山を上ってきた。

山道も、由里さんとチコの家のまわりも、家の灯りがあるだけで、真っ暗だった。隣に一軒、年配の男性がひとりで住んでいる家があるが、それ以外はいちばん近い家でも山道を何百メートル行った先にしかないという。時計を見ると午後十一時過ぎなのだったが、暗さと周囲の静けさ、そして今日一日の移動と混乱と恐怖が合わさった疲れで、もうとくに日付が変わったくらいの感じがしていて、そこに由里さんが、ご飯、と言ったとたんにやたらと安心が

わいてきて、座っていた腰から力が抜けて落ちていくみたいだった。空腹であることに気づいたというよりは、忘れていたお腹のなかの胃袋の存在やその空洞を思い出させてもらったみたいだった。

外からのドアを入ったところが食堂のような部屋になっていて、壁際にベッドが置いてある。夫婦は、テーブルについて、ベッドに寝そべりハルちゃんと遊び続けるチョコを眺めていた。由里さんが運んできたのは、黒いリゾットのようなものが盛られた大皿と、山盛りのサラダだった。

わー、と夫婦は声をあげた。サラダには赤と緑のキャベツのような葉や、細切りのにんじんなどが入っていて鮮やかだった。きれい、と妻が心から嬉しいときの声の出し方言った。

ビールも飲むでしょ、と由里さんがまたキッチンに戻っていき、飲みます、と言う私に妻が小声で、この黒いのってイカスミかな、と言った。

私は、どうかな、と応えた。米はたしかに真っ黒で、イカスミのリゾットみたいでもあった。けれども米に混ざって小さく切ったブロッコリーも入っていて、イカスミだったら和えたただけとしてもブロッコリーも黒くなると思う。でもブロッコリーは鮮やかな緑色のままだったから、イカスミじゃないと思ったが、しかしじゃあなんなのかと言われてもなんだかわからない。そしてそんな細かい分析をいま説明する気にはならなかったので、イカスミじゃないんじゃない、とだけ言った。

由里さんがステラの瓶とグラスを持ってきた。あと味噌汁もあるけど、いる？ と由里さ

んは言い、お味噌汁！ と夫婦は思い、食べたい、と妻が言った。

今朝までいたロンドンには、私の高校時代の友人のけり子の結婚式に招待されて来た。結婚相手がロンドン育ちのジョナサンで、ジョナサンは東京とロンドンを行き来しながら仕事をしていて私たちもこれまでに東京で何度もあったことがあった。両親のいるロンドンでも結婚のパーティーを行うことになったので、私たち夫婦や友人たちが招かれた。ジョナサンはロンドン育ちだが、彼の両親はスリランカからロンドンに移住してきたひとたちで、結婚式はスリランカのスタイルで行われた。ロンドンでは、七日間の滞在のあいだ、東京から一緒に来た窓目^{まどめ}くんと皮ちゃん^{かわ}と四人で行動をとにした。

窓目くんはけり子と同じく高校の同級生で、皮ちゃんは窓目くんの友達で私もいつの間にか親しくなっていたが、窓目くんと皮ちゃんがいつどこで知り合ったのかはよく知らない。聞いたかもしれないが忘れた。中学や高校の頃と違って、おとなになると親しいひととの親しさにおいて、どこで出会って、どういうふうに関しくなったかという歴史とか物語は重要でなくなつて、あれ、私たちどこで仲良くなったんだっけ、まあそんなことはどうでもいいか、みたいなことが増えるよね。

そう？ 私はよく覚えてるよ。たとえば由里さんと一緒に働いてた頃のこととか。

晴れ間ね。あそこはほんと、どうしようもなかったよね、と由里さんは言った。

妻と由里さんは専門学校の先輩後輩で、ふたりが二十歳くらいの頃に、学芸大学だか都立大学だか、そのへんにあった晴れ間という居酒屋で一緒にアルバイトをしていた。ふたりとも専

門学校は途中でやめて、由里さんはワーキングホリデーでロンドンに渡り、妻は町工場みたいな会社で働きはじめた。

という、私の知っている彼女たちの歴史が全部正確かわからないが、妻と由里さんにとってふたりが出会ったその頃のことは全然どうでもよくはないらしく、私の知らないひとの名前や出来事を、ふたりは呆れたように笑いながら語りはじめ、私はビールを飲みながらその話を聞いていた。

チコは依然としてハルちゃんに顔を近づけてなにか言ったり、反応を受けて笑ったりしていた、私はそれも見えていた。彼は日本語はほとんどわからないらしいので、私たちがなにを話していたもたぶんわからない。

あれ、私なにしようとしてたんだっけ、と由里さんは言い、あ、お味噌汁だ、とキッチンに戻りかけて、ベッドのチコに、もうお願いだから手え洗って、と日本語で言った。チコはブラジル生まれのブラジル人で、ふだん由里さんとチコのコミュニケーションは英語が中心らしいと妻が言っていたし、さっき由里さんは、*Wash your hands*、と言っていた気がするが、手え洗って、なんて日本語で言ってもわからないのだろうか。それともほとんど私たちに聞かせるみたいに、由里さんはそう言ったのだろうか。しかし夫婦なら毎日同じような場面で同じようなことを口にすることは多いはずで、チコも言われていることはだいたいわかっているのかもしれない。

由里さんがお碗に入った味噌汁と取り皿を持ってきてくれた。木の箸を少し懐かしいような

気持ちで手にして味噌汁に口をつけると、おいしくてまた腰が砕けるような感覚になり、夫婦揃ってため息のようなものを漏らした。入っていたのは茄子で、お味噌汁を身に含んで柔らかくなっていて、そのさまがいまの自分たちととても似ていて、うまいとかそういうこととは別の安堵するのに似たよろこびがあった。

この黒いのはなんですか？

それはお米だよ。

お米が黒いんですか。

そう。ああ、日本にはあんまりないよね。食べてみそ。

言われて、小皿によそって食べてみると、これもおいしかった。黒いお米は、白米より少し固く、締まったような感じで、ぶちぶちとした食感。白米のような甘味があるわけではなく、玄米とか粟を炊いたのみたいに香ばしい穀物の味がした。おいしい、と夫婦は胃袋の底から声を出すように感嘆した。早起きして大きな荷物とともに空港に行き、ボデイチェックを受け、イタリアの空港で散々迷った挙げ句、間違ったバスのチケットを窓口のちゃらちゃらした女たちに半ば売りつけられるように買ってしまった、打ちひしがれたようになりながらどうにかバスに乗って、日本の東北道みたいな寂しい景色の寂しい高速道路を四時間、夕暮れからすっかり夜になるまで乗って、チョコの運転で死ぬ思いをして、という今日の出来事がふやけて溶けていくようだった。

日本ではなんて言うんだろう、イタリアではリソネロって言って、よく売ってるんだけど。

riso はライスで、nero は黒。

黒米って日本でもたまに売ってるけど、こんなに黒くない気がする。もっと紫色っぽい。

土地が違うと、野菜とかも全然違うしね。あとお水も。イタリアは硬水だから。

感嘆しながら食べる私たちを見て、これ、あげるから日本でもつくってみたら、と由里さんは紙の箱入りの黒米を持ってきた。妻に頼まれて、レシピをメモ帳に書きながら、あー久しぶりだから日本語がうまく書けない、と言った。スマホではメールとか打つけど、鉛筆とかペンではほとんど書かないからなあ。はいこれ。

1、たくさんのお湯に塩。塩強め。

2、米（洗わなくてもOK、さらっと洗ってもいい）投入。

3、18分ゆでる。

4、固ければもつとゆでる。

5、いいなと思ったらザルで水切り。

6、その後、チャーハンの作る。

私ふだんお肉食べないから、今日はブロッコリー入れたただけだけど、肉とか魚入れてもいいよ。

これ味はなにでつけてるんですか？ と私は訊いた。薄味だけれどももの足りなくない、いい味だった。オリーブオイルと塩、と由里さんは応えた。で、すこーしだけお醤油入れてる。あとは今日に入れてないけど、好きだったらニンニクとか唐辛子とか入れてもいいね。

このへんでは日本の食材はまず手に入らない。味噌やら醤油やは、日本に帰ったときに持ってきたり、実家のお母さんがまとめて送ってくれるのだという。

まあアマゾンとかも使えるけど、でも日本みたいにすぐ来ないし。郵便とかも全然あてにならないんだよ。このへんは山のほほいちばん上の方なんだけど、家が少ないから山の途中に郵便とか宅配便の荷物が全部集まるところがあつて、で、そこから配達屋さんが届けてくれるんだけど、何日も持つてこないからこっちから取りに行ったり、イタリアはほんとそういうといい加減なんだよ。

チコが立ち上がって、キッチンに向かうと、ビールを持って戻ってきた。私と妻に瓶を差し出し乾杯をした。

イタリアで乾杯ってなんて言うか知ってる？ と由里さんが笑いながら言い、チンチンって言うんだよ。それで私たちは、もう一度、チンチン、と言いながらチコと杯を合わせた。

チコと入れ替わりにベッドに移った由里さんは、ハル寝ないのか、茜たちが来たから嬉しくて寝られないねえ、とハルちゃんに話しかけていた。仰向けのハルちゃんの体の上には、両脇の支柱にわたされた棒からくす玉みたいに透明の球がぶら下がっていて、それを揺らすとなかに入っている色つきのボールが転がったり、音が鳴ったりする。

あ、お土産、と妻が言つて、私は荷物を置かせてもらった寝室のバッグから由里さんへのお土産を持ってきた。神保町の本屋で買った布製の絵本で、主人公の熊が散歩に出かけると、亀に出会ったり、チョウチョに出会ったり、自動車とすれ違ったり、池に出たりする。亀の甲羅

の部分は今もこと中綿が入ったようになっていて、押すと気持ちがよく、フェルトのチョウチンは葉のように取り付けられた布紐の先に付けられていて、飛んでいるように自由に動かせる。茂みを触るとやはり内側に音の鳴る素材が仕込まれていて、カシヤカシヤと音がする。それをめくるとカニが現れて、カニに鼻を挟まれたクマは救急車で病院に運ばれて、みたいな話で、由里さんはとてもよろこび、ハルちゃんを抱き上げて膝に乗せ、それを開いて見せた。

私と妻もベッドの横でハルちゃんの様子をうかがう。由里さんとチコには笑ったり、なにか声を発したりと反応するが、私と妻に対しては泣きも笑いもせず、少し驚いたような表情を崩さなかった。由里さんの絵本を眺める様子も、興味深げではあるものの、よろこぶというよりはじつとなにかを吟味するような様子で、泰然としていた。頬の張った丸い顔に、よくお肉のついた大きな体の印象もあってか、赤ん坊とは思えないんだか会社の重役みたいな風格がある。由里さんがひらひらとチョウチンを動かすと、ハルちゃんは手を伸ばしたが、その様子も夢中になるといよりは余裕綽々で、チョウチンを手渡され、それを変わらず目を見開き、口を、お、の音の形にしたまま眺め、それから私たちの方になにか問うように顔を向けた。その方がこれを持ってまいったのか。妙なるものじゃの、と妻が言った。

よろこんでんのかな、と私は言った。
くるしゅうない、ささ、近う寄れ。

それじゃ殿様じゃない。イタリア生まれなんだから、法王がいいんじゃない。

ハル法王。

ハル、法王だって、すごいねえ。

あ、あとこれは由里さんに、と妻はもうひとつの袋を渡した。入っているのはプラスチックのジップ付き保存袋で、事前に妻が由里さんからリクエストされていたものを買って持ってきた。

うわー、ありがとう。超助かる、と由里さんはサイズ違いに何種類か買ってきた箱を抱えた。これがねえ、ないのよこっちには。

聞けば、料理や食材の保存に使うのではなく、ハルちゃんを外に連れ出すときに大変便利なのだという。哺乳瓶とかタオルとかウエットティッシュとかおもちゃとか、細かい荷物がたくさんで、それを小分けにでき、なおかつ衛生用品も清潔にしまっておける。透明で視認性が高いのも重要で、出先で急にになにかをこぼしたり、拭いたりしたいときにも、手早く探して取り出すことができる。

前に日本でまとめて買ってきたんだけど、使ってるうちに破れたりこのジップが壊れたりしてなくなっちゃって。とにかくさあ、出かけたらもうトラブルばかりなわけよ。こぼすし吐くし漏らすし。で、あっちこっち触りたがるからちよこちよこ手も拭いてやらないとだし。ベビーカー片手にこの子抱いてるから、基本どんな動作も片手でやんなきゃでしょ。もうそんなことやってみるまで全然想像できなかったけど。

ハルちゃんは自分を抱く母親がそんなことを話しているのをわかっているのかいないのか、いやわかっていないと思うけれども、やっぱりなにもわかっていないとは思えないような表情

と佇まいで、もしかしたらすべてわかっているのではないかとさえ思えてくる。

抱っこしてみる？ と由里さんは持ち上げたハルちゃんを妻に渡した。ベッドに腰かけてハルちゃんを抱いた妻は、重い、と笑って、二の腕に頭を乗せたハルちゃんの顔をのぞいた。変わらぬ余裕の表情。

生まれたときから粉ミルクで育ててるからってのもあると思うんだけどね。大きいのは。

由里さんは持病で飲んでいる薬があるため母乳はあげておらず、生後すぐから粉ミルクにしていた。

まあ、それにしたってでかすぎだけどね。一応健診では問題ないって言われてるんだけど。

チコなんかなにも考えずにどんどん飲ませちゃうし。

チコは食卓に腰掛けて煙草の葉を紙に巻いていたが、自分の名前が聞こえてこちらを向いた。

チコさんも子育ては手伝ってくれる？

くれるけど、気ままだからね。あんまアテにしてないよ。

由里さん、むかしより繊細になったね。

そお？

なんか、たぶん。

そうかもね。ロンドンにいた頃はもっといい加減っていうか、私もチコみたいな感じで生きてたかんだけど。ていうかやっぱりこっち来て、妊娠してからいろいろ神経質になったかも

ね。こんな山奥で子ども育てるとかも。

いやー、私だったら絶対無理。考えられない。不安でおかしくなっちゃうと思う。でも、茜だってむかしは結構ハードじゃなかった？

そうだったかも。

あとチコがあんなでしょ。ふたりともふらふらしてたらさすがにヤバイもん。

チコさんはお仕事はなにしてるの？

この山でハチミツつくってるところがあつて、いまはその仕事してる。

ハチミツ。

私ちよつと煙草吸ってくるから、ハル見ててもらつていい？

いいよ。煙草はやめてないんだね。

煙草はやめられないんだよね。妊娠中はやめてたけど産んでからはまた吸いはじめちゃつた。茜は？

私はやめたよ、何年か前に。

やめたんだ。仁くんは？ 吸わない。

僕もだいぶ前にやめました。

由里さんが表に出て行き、チコもさつき巻いていた煙草を手にしてあとを追いかけるようにドアに向かつて、ドアの前で、ハルちゃんを抱いた妻と私に、任せていいか？ と言うようなジェスチャーをして、妻は、OK、と応えた。それから私に、吸うか？ と訊いたが、私は、

NO、と応えた。

抱っこしてみる？ と妻が私にハルちゃんを渡した。受け取って、前を向かせ、膝に乗せてみると、なるほど重たい。十一キロなら、二、三歳の子どもよりは軽いだろうけれど、この子は二、三歳の子を抱くよりずっと重く感じる。比重が違う感じ。実際には比重が違うわけはないのだが、二、三歳の子の手足の長さや背丈を持たないハルちゃんの重さは主に胴体まわりによるので、その厚みや年齢と表情に合わないその量感が、抱いている腕や背中への驚きをもたらす。そしてそれを重みと感ずるのか。体を支える手を、脇の下から、脇腹へ下げてみる。なにか安心感さえ感じる胴回りだが、まだひとりで座っていることはほとんどできないと聞いたとおり、お尻だけでは重心が落ち着かず、脇を抱え直して少し体を横に向け、顔を見てみた。こちらを向かず、前にいる妻の方をじっと見ていたので、私も妻の顔を見た。今日一日気を張っていた疲れが見てとれた。由里さんと会ったのは十五年ぶりくらいで、そんな懐かしさや時間の差分も、こんな日に重なればそれも疲れになるだろう。

さつきは由里さんに訊かなかったんだけど、と妻が顔を私の方に向けて言った。
なに。

むかし由里さんと一緒にバイトしてた居酒屋に、ハルさんってひとがいたのね。常連のお客さんで。女のひと。そのひとが、もう店に来る男のお客さんほとんどやってるのね。

ハルちゃんを抱いて、微妙な表情をしている私を妻は見て、お客さんだけじゃなくてね、と続けた。私が早番で店に行ったら、店の入り口に上がる階段があるんだけど、その階段上がっ

たところでハルさんと店長が抱き合つててね。抱き合つててっていうかもう完全にセックスをしてたのね。

それも疲れのせいなのか、妻は視点が定まらず、なにか自分の意志でしゃべっているのではないような、昔の自分に憑依されたみたいに話し続けた。私は、いくら言葉を、まして日本語を理解しないだろうとはいえ、なぜハルちゃんの前でそんな話をするのかと思ったが、なんだか気圧されて口を挟めなかった。ハルちゃんは変わらず悠然とした構えで、妻の告解でも聞いているかのような雰囲気だった。

まあでも、あのハルさんとこのハルちゃんは全然関係がないんだけど。

そりゃそうだよ。なんでハルって名前にしたんだろうね。

春が好きだからじゃないかな。

春が好きなの？ 由里さん。

知らないけど、春はみんな好きでしょう。ねえ、ハルちゃん、と妻はハルちゃんに顔を近づけた。あなたはなんでハルちゃんって言うのかな。

ハルちゃんが、いやとも楽しいともつかない、おお、という小さな声をあげた。妻は、おお、と驚いたような顔をつくつて繰り返してみせ、するとハルちゃんがまた、同じ、おお、という声をあげた。さっきわずかのあいだ、少し異様に感じた妻の様子はもう消え去っていた。チョコと由里さんがドアを入ってきて、お、ハルいいね、仁くん抱っこされてるんだ。よかったねえ、と笑いかけた。ビールまだ飲むなら持つてくるよ、と言い、私は礼を言つて頼ん

だ。

チコがまたハルに顔を寄せて、ハル、ハル、ハル、と節をつけて歌うと、ハルちゃんは、おおお、と嬉しそうな声をあげて、私がチコにハルちゃんを渡すと、ベッドに仰向けに寝かせて覆い被さるように座り、ハル、ハル、ハルココ、ハル、ハル、ハルココ、と歌いながらハルちゃんの両手を持って踊らせた。由里さんがビールを持ってきて、チコ、手洗って！ とまた言う。Chico, Wash your hands!

チコは返事はせず、ベッドを降りると、キッチンの横の廊下を歩いて奥に行った。

もうほんとに、毎日十回くらい本気でむかついてる。

けんかする？

するよ。毎日だよ。私も怒るし、チコも怒るし。

チコさんはブラジルで育ったの？

そう。で、十代の頃にロンドンに来たのかな。あんまり細かくは知らないんだけど、お母さんはイタリア人で洋服のデザイナーなのね。チコのお父さんと結婚したけど別れてロンドンに来て、で、ブラジルって最近経済成長がすごい感じだけど、ちょうどチコが若い頃はすごい状況が悪かったから、それでチコはお母さん頼ってロンドンに来たみたい。私はワーホリでロンドンに来て、いろいろやったけどチコのお母さんがやってるブランドの店で一時期働いてたのね。チコもそこで働いてて、働いててっていうか、あんな調子だから、遊んでるみたいに見えるけど私からは。この家はもととお母さんのおばさんだかが住んでた家だね、もうなくな

ったんだけど、イラストレーターだったんだって。そこに飾ってある絵がそうだよ。

と指さされて見ると、馬に乗った男性の斜めに切り落とされた写真と、寒そうな海の前でポーズをとるひとの写真、バンドデシネみたいなカラーの漫画のカラージュが額装されて飾ってあった。

なんだかよくわかんないけど。それで、私とチコが結婚して子どもができて、ロンドンの家賃も高いし、仕事もないし、思い切ってここに越してきたの。そっちの廊下の奥、カーテンで仕切ってあるけどつながって、向こうはお母さんの家。まあ二世帯住宅みたいな。住んでたおばさんの旦那さんが建築をやったんだか大工さんだったかで、自分たちでこの家つくったみたい。

じゃあお母さんも向こうにいるんだ。

そう。でもないない日もあるし、顔合わせない日もあるし。二週間ぐらいどっか仕事で出かけてたり。お互いそこは適当に。

お姑さんだ。

そう、だけどそんな感じだから私は別にそんなにストレスはないかな。むかし一緒に働いたし。どっちかって言うとかチコとお母さんのほうがいろいろあるね。小さい頃に離婚して、しばらく離れて暮らしてたから。いつだったかふたりで大げんかして、大げんかったって言い合いたんだけどさ、そしたらチコが、自分を捨てたくせに、みたいなことをお母さんに言うのよ。それでお母さんもなにか言い返してたけど、イタリア語だから私完全にはわかんないんだ

けど。

チコが携帯電話で誰かとなにか話しながら戻ってきた。

まあそんなこんなでいろいろなありつつ、どうにかやつてるけどね。まあでもお金もないし、日本に帰ろうかってのも結構真剣に考えてる。

日本で。チコも。

チコも……まあチコも一緒にだけど、日本でのひとがやっていけるかどうか。由里さんは仰向けのハルちゃんをのぞき込み、あ、ちよつと眠そうになってきた。

チコは戸棚の引き出しを開け、なかをがさごしながら電話でなにか話し続けていたが、終わったらしく電話を切って、その場に立ったままなにか考えごとをしているみたいに宙を見た。

茜、お茶飲む？ あったかいの。

飲む。

オッケー。ちよつと待ってて、と由里さんは立ち上がってキッチンに向かいかけたが、ああそうそれであらかじめ言っておくと、と私たちの方を振り返った。うちでは葉っぱを育ててます。

なんの？ と妻が訊き返すと、大麻、と由里さんは応えた。ああ、と妻は返した。庭で？

庭じゃないよ。チコ、と由里さんはチコに声をかけ、なにか英語で言った。チコは、ふん、と返事をして、私を手招きし、中二階の寝室の方へ階段をのぼった。階段には、読書家だとい

うチコの本が各段に横積みされて、大変な量があった。村上春樹や村上龍、三島由紀夫などの英語版もあった。

チコは寝室の隣の、布を垂らして仕切られた部屋を指さし、布をどけ、その奥の暗幕のようなカーテンを開くと、なかは蛍光灯のような青白い灯りがついていて、四畳半ほどの部屋の床に鉢植えが十数個、整然と並んでいた。なるほど、大麻だ、と私は思った。あのよく車のバックミラーにぶら下がっている芳香剤とも、アジアン雑貨の店とかで飾ってあるTシャツの柄とも同じ形の葉っぱだった。

チコが、ずっと明るくして、温度も保っておく必要がある、と英語で言った。だから、カーテンをして、部屋を閉じている。だからこの部屋は開けないでくれ。

私は、OK、と言った。

もし欲しければひと鉢持って帰れ。

私は笑って、サンキューと言い、これはまだ小さい？ と訊いた。

まだ小さい。もう少し大きく育ててから、葉っぱを乾燥させる。

見せてくれてありがとう、と私は言い、チコは慎重にカーテンを閉め、ふたりで食堂に戻った。

あった？ と妻が言い、私は、あった、と応えた。

チコはあたたかい時期はハチミツ農家の仕事があるが、寒い時期にはその仕事を失う。すると収入がなくなるので、大麻を栽培しそれを売って金にしている。

大麻って、イタリアも違法？

違法だねー。茜たちは葉っぱも吸わない？

吸わない。

そうか。私も煙草はやめたいんだけど、葉っぱはナチュラルだしこっちはやめたくないんだよね。

カム、とチコが私をまた手招きして、今度は半地下になった廊下の横の部屋に入り、そこはチコの部屋だそうだが、机の引き出しから茶色いものが入った袋をいくつか取り出した。茶色く変色した葉っぱが入っていた。これがさっきの葉っぱを乾かしたもの。

さらに細かい、お茶っ葉を丸めたようなものが入った袋も見せてくれた。乾燥が大事だ、とチコは言った。乾燥がうまく行けば、高く売れるし、味もいい。乾燥がへただと、安くしか売れないし、味も悪い。

これは？

最高だ。

じゃああなたはたくさんお金を得られるね。

そうだ、と言ってチコは片手を上げて、私とハイタッチをした。チコは大切に袋を引き出しにしまつて、ふたりで食堂に戻った。いま見た乾燥大麻を入れた袋は、今日私たちが持ってきたあのジップ付き保存袋と同じだった。

ハルちゃんは眠つたらしい。チコは、疲れたから寝る、と言って自分の寝室に行った。私は

もう一本もらったビールを飲んで、由里さんにシャワーの場所と使い方を教えてもらい、シャワーを浴びた。

チコは、ロンドンに暮らしていた頃も、ふと思い立つとふらりとどこかへ旅に出てしまう。しばらく連絡がつかないと思ったら、いまアルゼンチンにいる、とメールが来たりする。自転車でヨーロッパを一周する旅に出たこともあった。二か月くらい経った頃、ポルトガルでサッカ―をしていたら転んで足の骨を折って飛行機で帰ってきたこともあった。ほんとあんなひとと一緒にやっていけるのか不安、と由里さんは言ったというその話は、私がシャワーを浴びていたときに妻が聞いた。

（文藝界 2019年11月号）

ぶんがく
文学 2020

二〇二〇年五月二六日 第一刷発行

編者——にほんぶんげいかきようかい日本文藝家協会

©Nihon Bungeika Kyokai 2020. Printed in Japan

発行者——渡瀬昌彦

発行所——株式会社講談社



東京都文京区音羽二—二—二二

郵便番号 一〇一—八〇〇—

電話——出版 〇三—五三九五—三五〇四

販売 〇三—五三九五—五八一七

業務 〇三—五三九五—三六一五

印刷所——豊国印刷株式会社

製本所——島田製本株式会社

本文データ制作——講談社デジタル製作

定価はカバーに表示してあります。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸第一出版部宛にお願いいたします。

